

# 実録・連合赤軍 あさま山荘への道程(みち)

2008(平成20)年1月29日鑑賞(松竹試写室)

★★★★



監督・脚本・製作＝若松孝二／出演＝坂井真紀／ARATA／並木愛枝／地曳豪／大西信満／菟田高城／タモト清嵐／小木戸利光／中泉英雄／伊達建士／一ノ瀬めぐみ／神津千恵／日下部千太郎／高野八誠／佐生有語／藤井由紀／安部魔凜碧／奥田恵梨華／椋田涼／粕谷佳五／川淳平／木全悦子／宮原真琴／鈴木良崇／辻本一樹／金野学武／金野明日華／比久廉／岡部尚／田島寧子／黒井元次／玉一敦也／伴杏里／坂口拓／奥貫薫／佐野史郎／RIKIYA (若松プロダクション、スコアレ配給／2007年日本映画／190分)

……連合赤軍の結成から1972年のあさま山荘事件までを描いた映画が、平成20年の今なぜ登場……？ それは、彼らの「実録」を伝えることによってたくさんの「なぜ？」を今の世に問うため。そして、そんなことができるのは、日本一過激な(?)若松孝二監督しかいない！ すさまじい「総括」の実態と、権力側からは絶対に描けないあさま山荘内の実態を知れば、あなたの「なぜ？」はさらに広がっていくはず……。

## 全く異なる視点から……

1972年2月28日午前10時に、あさま山荘に人質とともに立てこもる連合赤軍に対して人質救出作戦が開始された。この「あさま山荘事件」を描いた映画は2つある。1つは、高橋伴明監督の『光の雨』(01年)。もう1つは、原田真人監督の『突入せよ！ あさま山荘事件』(02年)。

私は前者は観ていないが、後者を観て「不完全燃焼……消化不良……何か物足りない……」という小見出しで、①この映画があまりにも警察サイドから見た人質救出作戦の準備とその決行、そして警察官の犠牲を重ねながらの人質救出成功というストーリー一辺倒で、それ以外のものを何も描いていないということ、②連合赤軍は一体何を主張し、何を求めたのか？ そして彼らはなぜ、あさま山荘に立てこもったのか？ また何よりも、1972(昭和47)年という年は時代の流れの中のどこに位置していたのか？ それらのことに全く触れられていないこと、③したがって、明確な時代設定

や時代状況の説明もなく、また「敵」である連合赤軍が何者であるのかもこの映画の観客には全く知らされないまま、ただ困難な状況下、人質救出に向かう警察集団の姿だけを追う結果になってしまっていること、の不满を述べた（『シネマルーム2』205頁参照）。

しかし、今回の若松孝二監督の映画は、まさにそのタイトルどおり、連合赤軍がその結成からあさま山荘事件へ至った道程（みち）の実録。すなわち、私が大学に入学した1967年前後の学生運動が高揚する中、1969年に赤軍派が結成され、1972年2月のあさま山荘事件に至るまでの道程（みち）を若松監督が「実録」として描いたもの。プレスシートにおける若松監督のインタビューでは、「連合赤軍を題材にした作品はこれまでもありましたけれど、僕は、『突入せよ！』だけは許せなかった。あれは、山荘の内側の若者のことを何も描いてないでしょう。表現をする人間は、権力側から描いたらダメですよ」と述べているが、私はその視点に80%以上賛成。

2008年1月という今の時代状況の中、「なぜ、今あさま山荘事件なのか？」という視点を含めて、『突入せよ！ あさま山荘事件』とは全く異なる視点から、あの「あさま山荘事件」を見直してみることも大切では……？

## 私の大学時代は、1967年4月から1971年3月まで

私が阪大に入学したのは1967年4月で卒業は1971年3月。私は大学入学後、すぐに学生運動に参加した。また、1人司法試験の勉強を始めたのが大学3回生の21歳の誕生日だから、1970年1月26日。したがって、この時まで私なりの参加形態で学生運動に関わっていた。もちろん、この映画に登場するようなド派手なものではなかったが……。

そのため、この映画に登場する①1967年10月8日の佐藤総理の訪米阻止、②1968年10月21日の国際反戦デーなどにも「ある形」で参加している。また、③1969年1月18日の東大安田講堂事件はテレビで観ていたが、その数カ月前には「東大闘争」にも「参加」したことがある。そんなわけで、日大全共闘の結成（1968年5月27日）等の動きはこと細かく知っている。しかし、試験勉強を始めた後の①赤軍派議長、塩見孝也の逮捕（1970年3月15日）、②革命左派による、板橋区上赤塚交番襲撃事件（1970年12月18日）、③赤軍派国際委員の重信房子のレバノンへの脱出（1971年2月28日）、④赤軍派と革命左派による、統一赤軍の結成（1971年7月15日）、⑤1カ月後、

名称を「連合赤軍」に変更、等の動きはニュースで知っている程度。

私の司法試験合格は1971年11月だったが、その頃から連合赤軍が山にこもっての軍事訓練を始めたらしい。そして翌1972年1月から有名な「総括」が始まったが、それをリードしたのは連合赤軍の委員長である森恒夫（地曳豪）と副委員長である永田洋子（並木愛枝）の2人。そして、榛名ベースが警察に発見されたため、山越えを開始したのが1972年2月16日だが、坂口弘書記長（ARATA）ら5名は2月19日あさま山荘に立てこもることに。そして皮肉なことに、彼らが最大の敵とみなしていたアメリカ帝国主義のニクソン大統領が理想の国と考えていた共産国家中国の毛沢東と会談したのは、坂口弘らがあさま山荘に立てこもっている2月21日のこと。そして遂に2月28日の機動隊突入劇にいたったわけだ。

この時期は私が司法試験に合格し、1972年4月からの司法研修所入所に向けて最ものにきな時期だったから、これらの動きは連日テレビを食い入るように観ていたもの。

## 見どころ その1——「総括」の実態

若松孝二監督がこの映画を監督・製作したのは、「なぜ、若者は立ち上がったのか？ なぜ、追いつめられていったのか？ なぜ、同志に手をかけたのか？ なぜ、山荘で銃撃戦を繰り広げたのか？ あの時代、いったい何が起きていたのか？」を今の世に問うため。そしてこの映画が3時間10分と長いのは、若松孝二監督があくまで「実録」にこだわったため。

そんな実録モノのこの映画の見どころは2つある。その1つは連合赤軍によってすっかり有名となった「総括」の実態。まるで軍隊ごっこのような(?)軍事訓練の様子や、共産主義思想を身につけるための学習の様子は、若松孝二監督がいろいろと聞き取り調査をしたことを元に描かれた実録だが、すごいのは森恒夫と永田洋子を中心としたすさまじい「総括」の実態。新聞で見ていた「総括」とは、こんな実態だったのかということがよくわかる。

そこで、私たちが考えなければならないのは、「なぜそうなったのか」ということ。もちろん簡単にそれを理解することはできないが、この映画がそれを考えさせる重大なネタを提供していることはまちがいない。

## 見どころ その2——山荘内での5人の言動

私が司法試験に短期で合格でき、また「しゃべり弁」と「書き弁」としての能力がある程度身についたのは、学生運動で書くこととしゃべることの訓練を徹底的にやったおかげ。つまり、受け身になって一方的に聞くだけの授業を受けるのではなく、書くため、しゃべるために主体的に勉強する習慣が身についたわけだ。あの当時のしゃべり方が理屈っぽかったのは当然だが、人質とされたあさま山荘の管理人牟田泰子（奥貫薫）に対するリーダー坂口弘のしゃべり方を見ていると、その理屈っぽさがよくわかる。この映画の第2の見どころは、山荘内での坂口をはじめとする5人のそんな言動だ。

坂口の言い分によれば、山荘に立てこもったことについては一方的に借用しているだけ。また管理人は人質ではなく、坂口たちの保護者。さらに管理人に要請したのは、革命側についてくれとはいわないので、権力側にはつかず中立でいてくれ、ということ。そして、坂口は管理人には絶対危害を及ぼさないと約束したが、さてこんな理屈が通用するの……？

誰しもそう思うのは当然。しかし、彼らが金品目当ての強盗犯ではなく、あくまで革命を目指している兵士だと自分を認識していることは明らか。そして、『突入せよ！ あさま山荘事件』だけは「許せなかった」と若松孝二監督が語っているのはまさにそういう視点。あさま山荘内における2月19日から2月28日までの10日間の様子も「実録」だから大きな価値がある。もっとも、そんな実態だったとしても、これを許すことは到底できず、重大な犯罪であることは明らかだが、ここでも今私たちに必要なのは、なぜ彼らはそこまで思いつめていたのか、という視点。私はそう思うのだが……。

## あの美人女優、坂井真紀が出演！

連合赤軍で最も有名な女性はおそらく2000年に大阪で拘束された重信房子だろうが、この映画には彼女の親友だったという遠山美枝子が登場する。学生運動初期の時代、デモに参加している重信房子や遠山美枝子の姿を見ていると初々しくて結構美人だが、何とあの美人女優坂井真紀がこの遠山美枝子役で出演！ 1970年生まれの坂井真紀は、前から重信房子という女性に興味があったとのこと。そこで本作品のこと

第五十八回ベルリン国際映画祭で最優秀アジア映画賞を受賞した『実録』は、日本中を震撼させた一九七二年のあさま山荘事件をメインとし、連合赤軍の結成と崩壊の過程を内側から描いた三時間を超える問題提起作。

現在の「ノ」天気日本と違い、日米安保条約改定を控えた六〇年代後半は大学紛争真っ盛り。と

ころが、六八年の東大安田講堂攻防戦を契機に一気に下降線。

# 今蘇る、内側から見たあさま山荘事件！



## 実録・連合赤軍 あさま山荘への道程

あすからテアトル梅田で公開

権力側からの過激派批判ではなく、活動家の目線に沿って描いていく。中盤の焦点は、森恒夫と永田洋子による同志たちの凄惨な総括「リンチ」なせ、「こんなバカなことを」と非難するのは簡単だが、選挙権すら行使しない今どきのノンポリな若者の理解はとっくに越えている。興味深いのは、山荘に「ねじれ現象」によって国会の機能を喪失しながら、その自覚すらない危機的政治状況の中「きちんと残された『実録』から学ぶことは多い。

そこで生まれたのが、極左グループが合体した連合赤軍。派出所からの武器強奪、山梨県新倉べるで革命前夜のような行動だが、それは本気！若松孝二監督はこれを籠城した坂口弘らによる女性管理人の説得活動。その論理は無茶苦茶から学ぶことは多い。

を、さらぎ徳二役で出演している友人の佐野史郎から教えられ、オーディションに駆けつけたとのことだ。

革命左派から合流し、連合赤軍の副委員長をつとめた永田洋子から嫌われた(?)彼女は、委員長の森恒夫から徹底的な「総括」を受けることになるのだが、そこには「共産主義者思想を固めるため」という大義名分だけではなく、女の嫉妬という面もありそう……。そんな、微妙な女同士の感情を含めた「総括」の『実録』を坂井真紀が熱演する壮絶なシーンは、この映画のクライマックスの1つ。是非そこにも注目を！

2008(平成20)年2月2日記

第1章 ハリウッド映画もいよいよ変容か？

大阪日日新聞 2008(平成20)年3月21日